

⑥ 11月12日（水）

來華印度僧の注解と漢人の注疏に現れた「中國化」

（1）佛教語「如是我聞」の「如是」をどう解釋するか

インド佛教の「**如是**我聞（**evam** mayā śrutam）」解釋

——「如是」は evam という一語であり、それ以上、分割できない——

鳩摩羅什（約350-409頃）譯『大智度論』卷一（T25, 62c-63a）：

問曰，諸佛經何以故初稱「如是」語。

答曰，佛法大海，信為能入，智為能度。「**如是**」義者，**即是信**。若人心中有信清淨，是人能入佛法。若無信，是人不能入佛法。

★以上の現代語譯は示さない。「如是」は不可分割の一語である！

親光菩薩等造、唐 玄奘（600/602-664）譯『佛地經論』卷一（T26, 291c）：
 「如是我聞」者，謂總顯己聞傳佛教者，言「如是事我昔曾聞」。

★以上の現代語譯は示さない。

「如是我聞」の「我」「聞」は分割するが、「如是」は不可分割である！

1 A 漢人注釋者による「如是」解釋

——「如是」は二字だから、「如」と「是」とを一字ずつ解釋せよ——

A 1 竺道生（355-434）『妙法蓮華經疏』卷上（續藏2B.23, 401b）：

「如」者，當理之言。言、理相順，謂之「如」也。「是」者，無非之稱。

「如」は、道理に従った言葉である。言葉と道理とが相従い一致することを「如」と言う。

「是」は、そうでないことが決してないこと（＝確かにそうであること）を言う。

A2 梁 未詳撰者『大般涅槃經集解』卷二「如是我聞」(T37, 383c)：

「如是」。案，僧宗曰，「**如**」者，**不異**之辭，明**阿難所傳與佛說不異**也。「**是**」者，明**即是佛說**也。……」。

智秀曰，「**阿難所傳與佛說不異**，曰「**如**」。言當於理，曰「**是**」也」。

〔『大般涅槃經』の〕「**如是**」〔という語について解説する〕。

精査すると、僧宗(438-496)は言う、「**如**」は、**違いがないことを言う言葉**である。〔この『大般涅槃經』で〕**阿難(Ānanda)**が伝える言葉は佛の教説と**違いがないことを明らかにしている**。「**是**」は、〔佛弟子 **Ānanda** の言葉が〕そのまま佛の教説であることを明らかにしている。……」。

智秀は言う、「〔この『大般涅槃經』で〕**阿難(Ānanda)**が伝える言葉は佛の教説と**違いがないことを「如」と言う**。〔佛弟子 **Ānanda** の言葉は〕道理に従った言葉であることを「**是**」と言う」。

A3 隋 智顗説、唐 灌頂記『維摩經略疏』卷一「如是我聞」(T38, 568b) :

古來多云, 「如是」者, 文「如」理「是」。文以巧詮為「如」, 理以無非曰「是」。

古來、多くの人々は言う、「**如是**」は、文章の言葉が「**如**」(=佛の教説と同じ)であり、道理が「**是**」(正しい)ということである。文章が言葉巧みに〔佛の教説を〕言い表していることが「**如**」であり、道理がそうでないことはない(=必ず正しい)ことが「**是**」である」。

⇒ 漢人は、「如是」を、「如」と「是」に區別して理解する！

1 B 來華インド僧が「如是」を解釋する例

——「如是」は二字だから、「如」と「是」とを一字ずつ解釋せよ——

インド僧の長耳三藏による解説

唐 圓測（613-696）『仁王經疏』卷一「如是我聞（**evaṃ mayā śrutam**）」（T33, 362b-c）：

長耳三藏釋有三義。

- 一、就**佛**釋，三世諸佛所說**無異**，故名為「**如**」。以**同說**故，稱之為「**是**」。
- 二、依**法**解，諸法實相故名為「如」。如如而說，故稱為「是」。
- 三、依**僧**辨，阿難所傳不異佛說，故名為「**如**」。永離過非，稱之曰「**是**」。

長耳三藏（隋の那連提梨耶舍 **Narendrayaśas**）の解釋は次の三つの意味である。

〔佛、法、僧という三寶のうち〕第一に、佛に基づいて解釋すると、〔過去、現在、未來の〕三世にいる諸佛の教説には違いがないから「如」と名づける。〔諸佛は〕皆、同じ教説であるから「是」と呼ぶ。

第二に、法（教説や諸存在）に基づいて解釋すると、〔以下に示す教説は〕諸々の事物の眞實の姿であるから「如」と名づける。それをそのままに説き示すから「是」と呼ぶ。

第三に、僧伽（＝教團）に基づいて解釋すると、〔佛弟子〕阿難（Ānanda）が伝えることは佛の教説と違いがないから「如」と名づける。それは永久に過誤を離れているから「是」と呼ぶ。

長耳三藏とは誰か？ 隋の那連提梨耶舍（**Narendrayaśas**）である。

☆ 1 唐 遇榮『仁王經疏法衡鈔』卷二：「長耳三藏」者，隋開皇初人，梵語那連提梨耶舍（Narendrayaśas）〈隋言尊稱〉，是北印度烏菴國人，形貌希奇，頂有肉髻，耳長高聳，因此立名。（續藏1.41, 67d）

☆ 2 唐 栖復『法華經玄贊要集』卷七：言「長耳」等者，梵云那連提梨耶舍（Narendrayaśas），隨言尊（⇒隋言尊稱），北印度烏菴國人也。形貌環奇，頂如肉髻，耳長而聳，目正處中，有異常倫，特為殊相。北齊時遊

化，至齊未久，遇周武帝滅法，避難潛遊，大隨御宇（⇒大隋御寓），重興三寶，降詔書請來弘譯。年一百歲，住大興善寺也。（續藏1.53, 326c）

☆ 3 船山徹『六朝隋唐佛教展開史』第一篇第五章注56.

中國に到來して、中國人聴眾に向かって佛教語を解説したインド僧は、インドでは意味のない、「如是」を「如」と「是」に分ける解説をした。これはインド本來の解釋ではなりたたない、漢語を母語として漢語で思考する聴眾を強く意識した説明！

インド本來の解釋	來華インド僧の解釋	漢人僧の解釋
「如是」 evam は分割できない	「如」「是」を一字ずつ解説	「如」「是」を一字ずつ解説

來華インド僧は、漢語で考える漢人たちに向けた「對機說法」を敢えて行った！

(2) 佛教語「方便 (upāya)」の解釋

漢人注釋中の「方便」解釋

以下の原文二種には現代譯しないが、「方」と「便」に分ける區別を認識せよ！

2A1 北魏 曇鸞『無量壽經優婆提舍願生偈註』卷二 (T40, 842b) :

三者、依方便門，憐愍一切眾生心，遠離供養，恭敬自身心故，正直曰「方」，外己曰「便」。依正直故，生憐愍一切眾生心，依外己故，遠離供養，恭敬自身心。

2A2 唐 窺基『妙法蓮華經玄贊』卷三 (T34, 695a-b)：

方便智有三或四。

一、「進趣方便」，謂見道前七方便智，進趣向果名為方便。所學有則曰「方」，隨位修順宜曰「便」。

二、「施為方便」，謂方便善巧波羅蜜多，後智妙用能行二利故名「方便」。

此則有三。一、教行方便，言音可則曰「方」，稟教獲安名「便」。

二、證行方便，空理正直曰「方」，智順正理名「便」。

三、不住方便，莅真入俗曰「方」，自他俱利名「便」。

上三皆是第二「施為」。

三、「集成方便」，諸法同體，巧相集成，故名「方便」。……。苞總有則曰「方」，以少含多名「便」。

四、「權巧方便」，實無此事，應物權現，故言「方便」，謂以三業方便化也。此對實智名為「方便」。利物有則曰「方」，隨時而濟名「便」。

此體即於施為中出，更無別義，故體唯三。

一方、2B來華インド僧の「方便」解釋を端的に示す原文資料を、現時点では同定できない。しかし、「如是」を「如」と「是」に區別して一字ずつ説明した場合と同様に、中國に到來して漢人聴眾に語義説明をした來華インド人僧が「方便」を「方」と「便」に分けて一字ずつ解釋した可能性は大きいと、私は思う。

次に、陳時代のインド人漢譯者、真諦（499-569 =**Paramārtha**）の解釋する「歡喜」を示す。菩薩十地という修行段階の初地（第一段階）である「歡喜地」（喜びに満ちた段階）について、真諦は「歡喜」を「歡」と「喜」に區別する。原文は次である。

(3) 真諦の「歡喜地」の「歡喜 (pramudita)」 解釋

天親 (= 世親、Vasubandhu) 造、真諦譯『攝大乘論釋』卷八 (T31, 206a) :

捨自愛名「歡」, 生他愛名「喜」。

自らへの愛着を捨て去ることを「歡」と名付け、他者への慈愛を生じることが「喜」と名づける。

インドの原語で「pramudita」という一語であったものを「歡喜」と二文字で漢譯し、更に「歡」と「喜」を別の意味に區別する解釋である。

これは陳時代の來華インド人僧、真諦三藏が漢釋した文獻に現れる說である。つまり真諦三藏自らの解説ではないが、真諦は彼の漢譯において、インド語原典にない、真諦三藏自身の説明を加筆することがある。そのことは、これまでの研究で明確にわかっている。従って、上に示した一節も、世親 Vasubandhu の說でなく、漢譯に補足した真諦三藏自身の說である可能性が、とても大きい。

以上をまとめる。

インドのサンスクリット語（梵語）では一語であり、區別できない一つの意味を示す語を漢字二字で漢譯する場合、その漢字二字は同義である。漢語の意味を明確化するために、二文字で示しただけである。

しかし、漢人と來華インド人は、その二字を解説する時に、單に二字は同義であると言わずに、その二字の意味を區別して解説した。

「如是」 (<i>evam</i>)	→	「如」	+	「是」	=	「如是」
「方便」 (<i>upāya</i>)	→	「方」	+	「便」	=	「方便」
「歡喜」 (<i>pramudita</i>)	→	「歡」	+	「喜」	=	「歡喜」

このような同義二字を區別する解説は、漢字と漢語的思考に基づく

その一方で、インド外國人が漢語で解説する場合、別種の解説が存在することもある。それは、同じ漢譯がインド原典では別の語である場合である。次に示す二例は、漢語「時」がインド原典では複数後である場合である。

(4) 「時」の解釋

鳩摩羅什譯『大智度論』卷一「一時 (*ekaṃ samaye*)」(T25, 65b)：

「時」者今當說。

問曰，天竺說「時」名有二種。一、名迦羅 (*kāla*)。二、名三摩耶 (*samaya*)。佛何以不言迦羅 (*kāla*) 而言三摩耶 (*samaya*)。

答曰，若言迦羅 (*kāla*)，俱亦有疑。

問曰，輕易說故，應言迦羅 (*kāla*)，迦羅 (*kāla*) 二字，三摩耶 (*samaya*) 三字重語難故。

答曰，除邪見故，說三摩耶 (*samaya*)，不言迦羅 (*kāla*)。

天竺＝インドには二種類の異なる「時」がある。原語「カーラ *kāla*」を「時」と漢譯する場合と、原語「サマヤ *samaya*」を「時」と漢譯する場合とである。漢語ではどちらも同じ「時」であるが、インド語は二種類あるので、どちらの意味で「時」と漢譯するかを理解するべきである。このように、『大智度論』は漢譯者鳩摩羅什の解説を含む漢譯文獻である。

これは、鳩摩羅什だけでなく、隋の長耳三藏（ナレーンドラヤシャス）の説とも共通する。このことを次の一節は示している。

唐 圓測『仁王經疏』卷一（T33, 363c）：

長耳（＝長耳三藏＝Narendrayaśas）云、「時有三種。一、「迦羅」時（*kāla*），此云「別相」時，如來戒律大戒時、出家時，國王得聞，餘不合聞。二、「三摩耶」時（*samaya*），此云「破邪見」時，謂五部『阿含』、九分達摩，不簡黑白，一切得聞。……。三、「世流布」者，如說一時佛在恒河岸、一時在申恕林。今言一時，但依後二，或唯第三。」（CBETA 2025.R2, 10-14）

⇒ 『大智度論』に見える鳩摩羅什の解釋は他のインド僧の解釋とも重なる。

(6) 鳩摩羅什譯『大智度論』の語義解釋：梵語と漢語を併記する

(6.1) インド原語と漢譯を故意に混淆して解説する

『大智度論』卷四四 (T25, 380b-c) だ：

問曰、何等是「菩薩」句義。

答曰、天竺語法、眾「字 (*akṣara*=文字=**phoneme**)」和合成「語 (*śabda*=**word**)」, 眾「語」和合成「句 (*pada*=**phrase**)」。如「菩 (*bo*)」為一字, 「提 (*dhi*)」為一字, 是二不合則無「語」。若和合, 名為「菩提 (*bodhi*)」, 秦言「無上智慧」。「薩埵 (*satta / sattva*)」, 或名「眾生」, 或是「大心」。為無上智慧故, 出「大心」, 名為「菩提薩埵」。願欲令眾生行無上道, 是名「菩提薩埵」。

⇒ この解説はインド原典には含まれない。漢譯者鳩摩羅什による補足。

(6.2) インド原語とその漢譯を示した後、漢譯に基づいて解説する

『大智度論』卷二 (T25, 72a) :

復名修伽陀 (*sugata*)。「修 (*su*)」, 秦言「好」。「伽陀 (*gata*)」或言「去」, 或言「說」。是名「好去」、「好說」。

「好去」者, 於種種諸深三摩提 (*samādhi*)、無量諸大智慧中去, 如偈說, 「佛一切智為大車, 八正道行入涅槃」。是名「好去」。

「好說」者, 如諸法實相說, 不著法愛說。觀弟子智慧力, 是人正使一切方便神通智力化之, ……。如是等種種知弟子智力而為說法, 是名「好說」。

同卷 (T25, 72c) :

復名舍多提婆魔菟舍喃 (*śāstā devamanuṣyāṇām*)。「舍多 (*śāstā*)」, 秦言「教師」。「提婆 (*deva*)」言「天」。「魔菟舍喃 (*manuṣyāṇām*)」言「人」。是名「天人教師」。